

旭公民館だより

発行 令和8年3月
旭公民館
館長 伊吹 公雄
電話 45-5903
FAX 45-5903



いざという時に備えて

広谷町防災研修会



座布団を使った簡易ベッドの作成にも挑戦しました。

屋外ではかまどで湯を沸かし、アルファ化米の試食も行われ、非常時の食事を体験。

また、避難所生活で特に困るとされるトイレ問題についても、ビニール袋と新聞紙を使った簡易トイレを作ってみて学びを深めました。

森俊夫町内会長は、「いざという時にあわてずにすむよう実際に体験しておくことが大事。もっと多くの方に参加してもらえたら」と話されていました。

参加者からは、「みんなで協力して作ることができて良かった」「実際に体験できて、助け合うことの大切さを感じた」「一人暮らしなので、災害時にどうすればいいか不安だったけれど、今回の体験で少し安心できた」といった声が聞かれました。

また、ある参加者は「みんなの顔が見られるから、こうした町内会の行事に参加しているのよ」と、地域のつながりの大切さを語ってくれました。

“災害は忘れた頃にやってくる”ではなく、

“いつ起きてもおかしくない”時代。

地震には日頃からの備えを。大雨の際は早めの避難を。

まずは自助、そして共助。普段からの近所づきあいや助け合いの心が、いざという時に大きな力になります。

今回の研修は、地域の防災力を高める貴重な機会となりました。



机・座布団を使った簡易ベッドの作成



防災士の説明を熱心に聞く参加者たち



(裏面へ) 親子で協力。パーテーション(間仕切り)の設営



2月17日、旭公民館管内の各地で、第一中学校1年生と地域の高齢者とのふれあい交流会が行われました。

東町友遊サロン（寺延興三サロン長）と東町老人クラブ（高橋弘諭会長）との交流会には、一中1年生4名が参加し、グラウンドゴルフと2種類のゲームで交流を深めました。グラウンドゴルフが初めての生徒も「めちゃくちゃ楽しかった！」と笑顔。

さらに、生徒たちが自ら考えた風船バレーや、昭和歌謡のイントロクイズでは、中学生自身が司会進行を務め、会の雰囲気をも明るく盛り上げました。

イントロクイズでは「歌はわかるけど曲名が出てこないのがもどかしい！」「加山雄三の『君といつまでも』が出てきて懐かしかった」「自分が中一的时候、音楽の授業で流行歌を先生が教えてくれたのを思い出した」など、参加者のみなさんからうれしそうな声が聞かれました。

また、交流の中では、かつて第一中学校に勤務していた元教師の方が校歌を紹介してくださいました。

昭和22年（1947年）の創立とともに制定された校歌は、詩人・木下夕爾による作詞で、戦後の新しい時代への願いが込められています。

第一中学校校歌



いざ新しき世のために
若き力をこぞりつつ
歌声高く わくところ
ああ 友よ 希望をこめて
たたえばや 我等の一中



語られる想いに、心を寄せる生徒たち

木下夕爾は、福山市御幸町出身の詩人で、叙情的な詩風で知られ、戦後の日本詩壇を代表する一人として活躍しました。その作品は、自然や人々の暮らしへのまなざしにあふれ、今も多くの人に親しまれています。

元教師の方は、「“新しき世のために”とは、戦前の軍国主義を反省し、戦後の新しい民主的な社会を築こうという願いが込められている」と語り、生徒たちも真剣な表情で耳を傾けていました。

生徒たちはこの日のために、何度も集まって企画を練り、準備やリハーサルを重ねてきたそうです。その成果もあって、「本番の出来は100点満点！」「コミュニケーション能力が上がった気がする」と、達成感に満ちた感想が聞かれました。

今回の交流会は、地域と学校が手を取り合い、世代を超えて笑顔と学びが広がる素敵な時間となりました。



あっ、この曲知ってる—昭和の名曲に会場がひとつに 笑顔がはじける風船バレー。世代を超えて大盛り上がり